

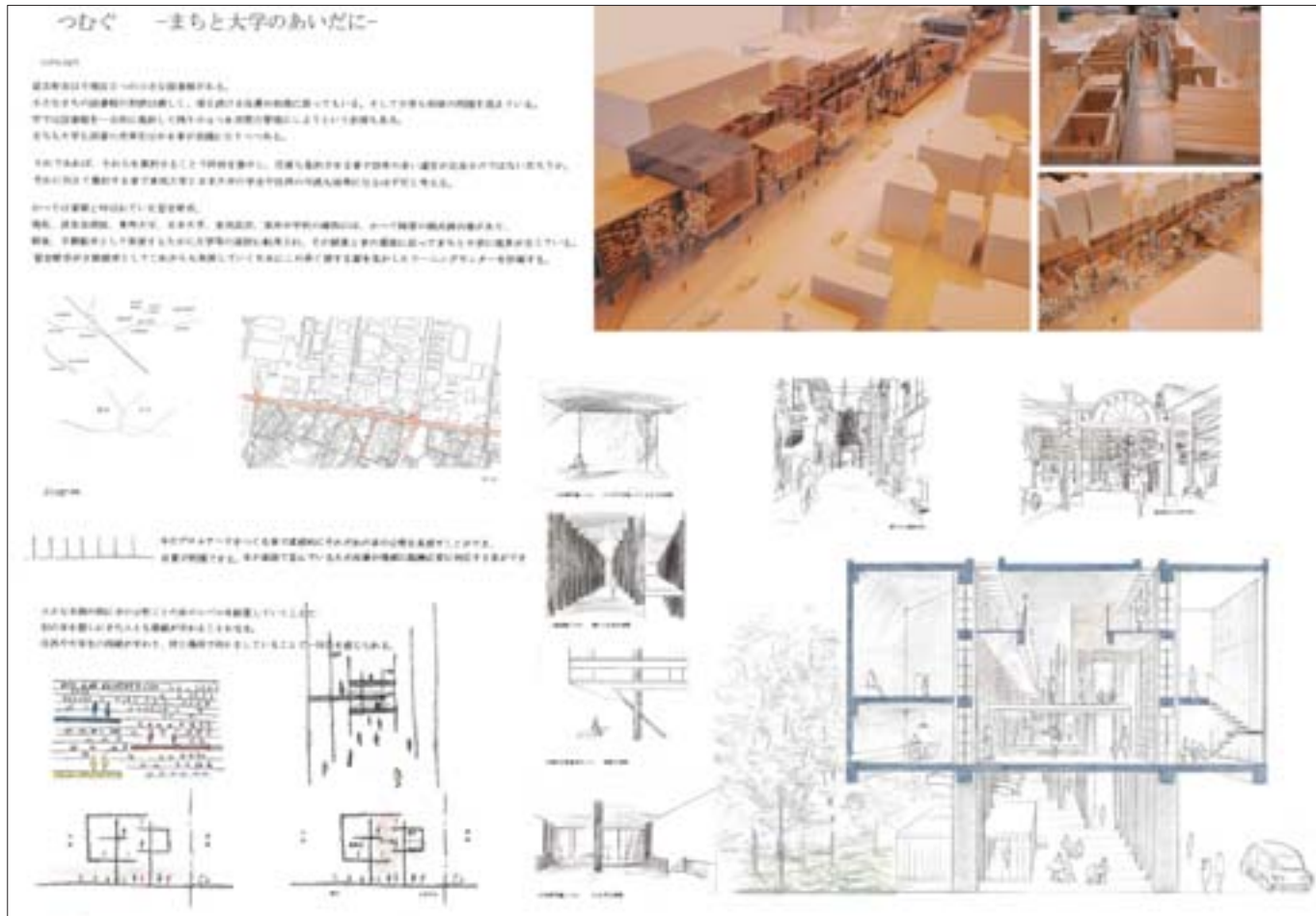


つむぐ まちと大学のあいだに

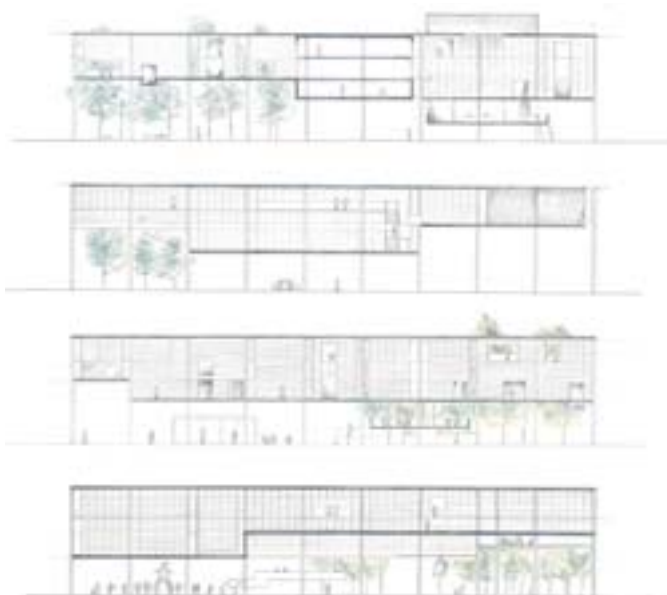
橋 聡子 (はし さとこ)
日本大学 生産工学部 建築工学科

最優秀賞

JIA全国出品作品



習志野市は今現在5つの小さな図書館がある。
小さなまちの財政は厳しく、増え続ける在庫の処理に困っている。そして大学も同様の問題を抱えている。
市では図書館を一か所に集約して残りの4つを民間の管理にしようという計画もある。
まちも大学も図書館の充実をはかる事が困難になりつつある。
それであれば、それらを集約することで財政を集中し、在庫を集約させる事で効率の良い運営が出来るのではないだろうか。
それに加えて集約する事でふたつの大学の学生や住民の交流も活発になるはずだと考える。
かつては軍郷と呼ばれていた習志野市。
現在、済生会病院、東邦大学、日本大学、東邦高校、東邦中学校の場所には、かつて陸軍の騎兵練兵場があり、戦後、文教都市として発展するために大学等の施設に転用され、その結果1本の道路に沿ってまちと大学に境界が生じている。
習志野市が文教都市としてこれからも発展していくためにこの長く接する面を生かしたラーニングセンターを計画する。



講評
都市のなかで「学びの場」をどのようにするかは、国内外に限らず、緊急課題である。なぜならば、日常の生活から地球問題に至るまで、課題を解決するプロセスは、この「学びの場」を起点として、磨かれ、創造されるからである。
敷地は、千葉県習志野市の「一本の道路に沿った「大学や高校のキャンパス群・病院」エリア」を設定している。官民・異分野施設・敷地や道路などの境界を縦横にまたがり、相互に「つむいで」いる空間構成は、木の素材と合わせ、心地よいし、「ラーニングセンター（学びの場）」らしい賑わいと落ち着きを感じる。
本のプロムナードは、まるで本棚が直接角角にのらんでいるような、また、自然光の読書空間を、大きなスケールの模型で検証するなど、細部への眼差しも配慮されている。まさに都市の「街角ブラウジング」にリアリティを感じる。
何よりも、作者の意図と想像を超えて、実はこのバナキュラーな「学びの場」が、ユニバーサルな世界標準モデルの「学びの場」への進化を示唆しているのである。
提案の発展性の視点から秀逸である。地球規模の展開を予感させる提案に成り得る。
(審査委員：鳴海 雅人)

